



堀景山伝考

著者	高橋 俊和
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第307号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00122581

論文要旨

本論文は、江戸時代中期の儒学者堀景山（1688～1757）について、その学問観と人物像の全貌を明らかにすることを目的としたものである。景山は、林羅山と並んで藤原惺窩門下の四天王と言われた堀正意を曾祖父に持つ儒学者である。京都における名門の出である。徳望を有し、広島藩主の側儒として厚遇されるが、当時の伊藤仁斎や荻生徂徠のように新しい学説を首唱するタイプの儒者ではなかった。晩年に、医学修業のために松坂から上京してきた青年本居宣長を漢学書生として堀塾に受け入れ、宣長が後に国学者として有名になったことで、結果として今日注目されることになった人物である。

古典的名著『本居宣長』で村岡典嗣が指摘して以来、契沖学をもって宣長を「学問」というものに開眼させ、後に賀茂真淵に師事する契機を作った人物として景山を第一に挙げることに異を唱える者はないであろう。定説と化していると言ってよい。しかし、村岡をはじめとする諸先学の景山への言及は、後年、国学の大成者となる宣長の思想から見た景山像でしかない。しかも、宣長に大きな感化・影響を与えたとされる景山自身の著作は、初学者を啓蒙すると言われた『不尽言』一書を拠り所とし、また、人物像にしても、宣長が五年半余りにわたって記した『在京日記』に依拠したものである。いずれも、景山像の全体から捉え、論じたものとは言い難い。

堀正意以来の家訓であると思われるが、堀家の子孫は著作を有しながらも、それを上梓していない。景山も例外ではなかった。啓蒙書扱いの『不尽言』の草稿本が何度か転写されて残るだけで、他の多くの著作は日の目を見ないで来ている。これまで、景山自身の学問なり人物なりの全体像を、先学が確立できなかった所以である。

「堀景山伝考」と題する本論文は、「Ⅰ 曠懷堂と堀景山年譜」「Ⅱ 学問論と思想」「Ⅲ 貴紳・儒者との交流」「Ⅳ 詩文稿」「Ⅴ 紀行文」の五部で構成している。引用する漢詩文の資料については、訓読・通解・語釈を付して実証的に検討する方法を基本的な姿勢とした。

第Ⅰ部では、景山の伝記を考察するにあたり、最初に父蘭皐が家号を「曠懷堂」と命名した経緯を論じ、新出資料となる堀創氏所蔵の「曠懷堂堀氏譜系」「堀氏譜図」をもとに、諸資料を補足して景山の年譜を考証した。京都在住の儒学者として、伊藤仁斎・東涯の「古義堂」と蘭皐・景山の「曠懷堂」が、父子二代にわたり学派を超えて親しく交流していたことが明らかになる。朱子学を奉ずる景山が、新たに学問の方法に覚醒し、それを弟子の宣長に伝えていく流れは、父蘭皐の代からの古義堂との親交に起因していたのである。小伝を付記した第Ⅰ部は、

本論文の基盤となる章である。

第Ⅱ部「学問論と思想」の中で、一、二、三章は、朱子学者である景山が、江戸時代中期の巨儒である伊藤仁斎・東涯や荻生徂徠と交流し、その教えを受けることによって、父祖代々継承してきた学問・思想の何を変え、何を変えなかったかを考察の基底に置いて、資料を精査したものである。四、五章では、『春秋経伝集解』と『日本書紀』に景山自身が書き入れした訓点をもとに、漢学者景山の施訓を検討するという側面から、景山の学問観の一端を明らかにした。

第Ⅲ部は、景山が交流した貴紳・儒者の例をあげて、景山の人物像と交遊圈について考察したものである。堀正意の曾孫として、京都における名門の出であるということだけではない。交遊していた堯恭法親王（妙法院宮）や近衛家熙、伊藤仁斎・東涯、荻生徂徠、室鳩巢など、当時の第一級の知識人・文化人と呼ばれる人達によって、景山はその学識と才能を高く評価されていた。

第Ⅳ部には、景山の漢詩（31首）と文（13篇）を収めた。「詩稿」に収めた景山の漢詩には、古文辞学でいうところの模擬剽窃の気配はない。江村北海が「其詩結構整齐、亦一時作家」と評したごとく、詩句の構成は見事である。「文稿」には、序・跋・銘・記・書簡を収めた。それぞれの「語釈」で挙げたように、経書と史書に典拠をもつ語句を多用しているのが大きな特徴である。景山が徂徠に対して明言していた「文章」についての持論を裏づける。景山の学問領域と趣味・教養の広さと深さ、そして幅広い人脈を知るにはいずれも貴重な資料である。

第Ⅴ部は、参勤交代で御供した江戸から、中山道を経由して京都の自宅に戻るまでの紀行文『ぬさのにしき』を対象とした。所在不明の『景山先生和文稿』に「木曾路日記」として収められていた作品だと思われる。この作品の文章に用いられている語句・典拠等を詳細に検討してみると、漢学者景山が日本の古典、特に和歌・物語に関して相当な知識と見識を有していたことが分かる。

本論文は、以上の五部構成の内容で、堀景山の全体像を明らかにすべく、多角的に諸資料を調査・分析した結果である。本居宣長を論ずるときの漢学の師という一方向から見ていた従来の景山像を、一人の人物として立体的に捉えてみたという構想のもとでの試みである。

以上

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	高橋 俊和
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤弘夫 教授 佐倉由泰 准教授 片岡龍
論 文 名	堀景山伝考
<p>本論文は、本居宣長の師として著明な、江戸時代の儒学者堀景山の人物と学問の全体像を、今日蒐集できる限りの資料の調査・分析を通じて再構成したものである。</p> <p>本論文は、「Ⅰ 曠懷堂と堀景山年譜」「Ⅱ 学問論と思想」「Ⅲ 貴紳・儒者との交流」「Ⅳ 詩文稿」「Ⅴ 紀行文」の5部から構成される。なお、Ⅳ・Ⅴは資料編的性格も有している。</p> <p>第Ⅰ部では、初めに景山の父蘭皐の家号の由来を説き、景山さらには宣長に継承される「自楽」の学風を論じる。次いで新出の堀家の系譜図等をもとに、堀蘭皐・景山の「曠懷堂」が伊藤仁斎・東涯の「古義堂」と父子二代にわたって学問的に親交していた事実を明らかにする。最後に、以上の背景をふまえた堀景山の年譜の緻密な考証とそのエッセンスたる小伝を提供している。第Ⅰ部は、堀景山の人物と学問の全体像の再構成を企図とする本論文の基盤を成している。</p> <p>第Ⅱ部では、初めに文章論を中核とする景山の学問論と思想を、伊藤仁斎・東涯の古義学や荻生徂徠の古文辞学など同時代の学問論・文章論との交渉という観点から検討し、その結論を「下学の道から上達の理へ」としてまとめる。すなわち、同時代的影響は学問の方法（下学の道）のみにとどまり、学問の目的（上達の理）においては父祖以来の朱子学の理念が揺らいでいないとする。次に、ただし同じ朱子学といっても厳格主義的傾向の強い崎門派の朱子学とは異なることを、景山の代表作である『不尽言』がもともと崎門派の感化を受けた藩の執政の質問に答えた書簡であるという執筆背景を探ることを通じて明らかにする。最後に、景山が書き入れた『春秋経伝通解釈』『日本書紀』の訓点の分析を通じて、その訓読史上の位置づけを確認しながら、景山の学問論と思想がそこに反映していることを立証している。</p> <p>第Ⅲ部では、妙法院サロンでの学問的交遊、近衛家熙による『大唐六典』の校合作業、堀家伝来の古像を主題とする著名学者らとの詩の応酬、広島藩の藩主・豪商らとの交遊などにおける景山を中心とした文化活動の実態が精査されている。第Ⅳ部では、今日蒐集できる限りの景山の漢詩・漢文を翻刻・訳注する。第Ⅴ部では、和文による景山の紀行文を翻刻・注解し、和歌・物語を中心とする日本の古典にたいする景山の造詣の深さを論じる。</p> <p>本論文は、従来その文学史的・思想史的意義の大きさが認識されていながら、史料制約のために、宣長の「もののあはれ」論の前史としてしか論じられてこなかった堀景山の人物と学問の全体像を、徹底的な資料の収集と綿密な調査・分析によって再構成し、堀景山研究の最上の到達点を示すことに成功している。それによって今後、より大きな文脈における文学史的・思想史的接近への道を整備し、具体的には近世京都を中心とした文化交流の実態と学術系譜の発掘による豊かな日本文化史論への展望を開いている。本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	